



共同通信



2009年1月23日 149 (359号)

日本基督教団 西宮公会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町10-22
TEL0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email : koudou@gamma.ocn.ne.jp
<http://koudou.jp/> 振替01170-3-4901
ホームページアドレスが新しくなりました。

時代にふり回されるのではない 自分の人生を語ってほしい、
あの時 心を躍らせて生きた 自分の人生を語ってほしい、
後悔に 身をふるわせたこともある 自分の人生を語ってほしい、
笑い 泣き 歯ぎしりをした 自分の人生を語ってほしい、
今日 こんな決意をしたという 自分の人生を語ってほしい

To tell the story 49 『Kさんのこと』

兵庫県南部大地震を記録する特別セミナー講演録「河村宗治郎」～被災者であり 被災者といっしょに生きてきた河村宗治郎を語る～の製本のお手伝いに来ていた1月15日、順子さんより『共同通信』に何か書いてくれない?と言われて「は、はい...」と答えてしまった私は、公会、共同幼稚園のメンバーではなく、気づきと覚醒を求めてよく公会教会に出入りしている、ぼんやり生きる(共同で本気で生きる方々に出会うから自覚できます)よそ者です。

その1月15日の木曜日、私は午後から地震で出会ったKさんというおっちゃんの家へ行きました。14年前地震が起きた後、私は「障害児・者

支援の会」というグループに入り、被災された障がいを持つ方々と出会ってきました。その会がなくなっても訪問を止めることができなくて「もくよう会」というグループを作って3人で細々と訪問を続けてきました。Kさんはその中のおひとりで、地震の直後から避難所から神戸学生青年センターへお風呂に入りに来られるための送迎をしたり、避難所や入院先、家を再建されてからは家に会いに行ってはあれこれと話したりいっしょにお酒を飲んだりしてきました。Kさんは地震の4年前に突然頸椎の難病を発症し今までやってきたことをひとつひとつと諦めなくてはいけない生活に入っていたところでした。

お酒とタバコが大好きで、それだけはどんなに医者に言われても止めずに楽しんでいました。太い眉のいかつい顔をしているのですが、痛いことや怖いことは断固拒否する人です。MRIの検査でもバックミュージックは松山千春で、と頼んでおきながら始まる前に逃げ出してしまい、逃げる時に松山千春の歌が流れていた...と恥ずかしそうに話していました。去年になって喉の筋肉が弱って食べ物なかなか飲み込めなくなっても口から味わって食べたいとほんの少しのものしか食べられなくなってもその方がよく、焼酎だけは毎日欠かさず3杯、むせることなく飲めるそうです。

12月18日、いつものようにKさんの家に行くと、奥さんが青い顔をして出てきて、実は11月に発作を起こして救急車で入院したとのことでした。搬送先を探すうちにまた救急車の中で発作を起こして危険な状況になったけれど一命はとりとめた、ということでした。びっくりして急いで病院に行くと、Kさんは大きく口を開けて一生懸命息をしていました。乾燥で舌が割れているし、顎はしんどそうだし、とても痛々しい姿でした。ほとんど反応がないのですが、話をしていると時々口をゆがめて何かを表そうとしていたので、聞こえている...と思いました。胃ろうで一応栄養は摂れているということですが、

ずっとこういう状況なのだろうか...毎年1月17日近くの木曜日にやっていた川上盾出前ライブはここでもできるだろうか...前の公園で大きな声で歌ってもらったら聞こえるよね...などと、去年はその公園で誰もいない中、雪が舞う寒い中で雅楽を演奏していた方たちがいたことを思い出して話していました。

12月30日、河村宗治郎さんの「兵庫県被災者連絡会」がある本町公園での餅つきに参加し、そのあと東遊園地でも餅をつき（あ、私は「よいしょ〜！」とかけ声をかけるだけなのですが...）「ひょう太くん」（編集部注 昨年、霜や雹によって傷がついてしまった青森県三戸町のリンゴ。味は変わらないが商品価値が落ちてしまい、“ひょう太”くんとして特別販売されていた）をお渡しした帰りに病院に寄ってみました。そうしたらおっちゃんももういませんでした。Kさんは私たちが最後に会ったことになった、一生懸命に息をしていた12月18日の2日後に亡くなっていたのです。

1月15日の木曜日、川上盾さんをお願いしていつものようにKさんのお宅で出前ライブをやってもらいました。Kさんは1年に一度のこの出前ライブを楽しみにしていただき、今度もいろんな人を誘っていたそうです。奥さんが用意して壁に貼っていた、はにかんだ笑顔のKさん

の大きな写真の前でいつもKさんがリクエストしてくれた河島英五の「時代おくれ」、松山千春の「大空と大地の中に」を中心にKさんが好きだった歌を川上盾さんにたくさん歌ってもらいながら、14年間の思い出話に花が咲きました。Kさんは発作が起きた日の午前中に車椅子で奥さんと近所を散歩して、普段は無愛想なのにその日は近所の人たちに挨拶していたそうです。それから入院してから意識のあった時、奥さんに「たくさん幸せもらった。ありがとう」と言ったそうです。「いろいろと無理を言ったり、病気になってからは特に気難しくなるとても苦労したけれど、この言葉ですべてゆるせる気持ちになったわ～！」と奥さんは泣きながら笑っていました。「長い間本当にありがとうございました」と言われたけれど、いやいやまだまだしつこく写真のKさんに会いに来る、そして奥さんと時代おくれのおっちゃんの悪口に花を咲かせるのだ～！と心の中で思っていました。

一日二杯の酒を飲み さかなはとくにこだわらず マイクが来たなら微笑んで

十八番をひとつ歌うだけ 妻には涙を見せないで 子どもに愚痴を聞かせずに

男の嘆きはほろ酔いで 酒場の隅に置いて行く 目立たぬようにはしゃがぬように

似合わぬことは無理をせず 人の心を見つめつづける 時代おくれの男になりたい

(宮本 真希子)

兵庫県南部大地震犠牲者追悼の日記念礼拝

説教 それは今を生きる真剣な努力である」

2009年1月25日 菅澤 邦明

“おだやかな、ふつうの生活”
“ありきたりの休日”が
奪われてしまいました

「あしたは月よう日」(長谷川集平、文研出版)は、1995年1月17日の兵庫県南部大地震がテーマです。しかし、地震の被害などのことはどこにも描かれていません。描かれているのは、月曜日の前日、ある家庭のある家族の日曜日です。「日よう日や、ええ天気やのに、お父ちゃんは、テレビばかり見とう。あ、はなくそ、ほじくっとう」「ほじくった、はなくそを、ぴん、ととばしよう。きたないなあ。はなげ、でとうで」と、子どもたちの観察する、しかし“おだやかな、ふつうの生活”“ありきたりの休日”です。

「あしたは月よう日」の見開きに、絵本の内容とは別に、「1995年1月17日、休日明けの火曜日の朝、淡路・神戸を中心に大きな地震がありました。大変な被害があり、多くの人々が亡くなり、傷つきました。この絵本は、その朝まで、おだやかな、ふつう

の生活を送っていた方々にささげたいと思います。」と、作者である長谷川集平の使信が書き込まれています。

今日、兵庫県南部大地震で犠牲になった人たち、中でもこの地域でなくなった人たちを追悼する礼拝に、たくさんの人たちに集まっただきました。誰よりも何よりも、犠牲になった人たちが奪い取られたのは、その日、そして明日も生きるはずだった“おだやかな、ふつうの生活”“ありきたりの休日”です。ここには、犠牲になった人たちの遺族も参加していますが、亡くなった人たちと同じように“おだやかな、ふつうの生活”“ありきたりの休日”を迎えることができないまま、大地震からその14年を過ごしてきました。

パレスチナ、ガザの人たちが
奪われ続けてきたのは
“おだやかな、ふつうの生活”
“ありきたりの休日”です

ガザのパレスチナ人に対する、イスラエルの攻撃が続いています。今この時も、パレスチナ人の命が奪われているのですが、ずっと奪われ続

けてきたのが“おだやかな、ふつうの生活”“ありきたりの休日”です。1948年に始まった中東戦争の時に、パレスチナ人たちは自分たちがそれまで過ごしてきた“おだやかな、ふつうの生活”“ありきたりの休日”が、あたりまえではなくなりました。1994年にエルサレムで出会ったパレスチナの人たちは、不自由なりに家族の生活を守っていました。たくさんのお子もたちに囲まれて、その子どもたちを育てることを誇りにしていました。結婚が間近なAさんには、もうすぐ完成する2人の住居に案内してもらいました。パレスチナの人たちを訪ねたその時の街角で、“わたがし屋”を見つけて一本買い求めたりしました。イスラエル軍による厳しい監視のもとで、“おだやかな、ふつうの生活”“ありきたりの休日”があるべきこととして守られていました。2008年12月から始まった、ガザのパレスチナ人に対して加えられたイスラエル軍による空爆で、1300人を超える人の命が奪われてしまいました。半世紀以上にわたりガザのパレスチナ人たちの、あるべき“おだやかな生活”“ありきたりの休日”はおびやかされ続けてきましたが、かすかとは言え、守るべき“おだやかな生活”“ありきたりの休日”さえもがおびやかされて、1300人を超える人が殺されてしまったのです。

しんどい同じことを繰り返すためには、惰性を捨てることである

14年前、兵庫県南部大地震でたくさんのお人の命が奪われることになりました。奪われたのは、その人たちの“おだやかな生活”“ありきたりの休日”でした。同じように、その人たちと過ごすはずだった残された家族が失うことになったのも“おだやかな生活”“ありきたりの休日”でした。地震から14年、地震で犠牲になった人たちを追悼する日を迎えています。昨日は、兵庫教区の主催する「兵庫県南部大地震犠牲者追悼の日礼拝」が、神戸栄光教会で行なわれました。会場で手渡された資料には、亡くなった人、壊れた住宅などの記録と「失われたいのちに思いを寄せるために、忘れてはならないことを覚えるために、与えられたつながりをつないでいくために、教えられたことを大切に伝えていくために」と書き込まれていました。過去の出来事や体験に、“思いを寄せ”“覚え続け”“つないでいく”“伝えていく”のは難しいし、しんどいことです。記念の礼拝を繰り返すことが惰性になってしまうのはあり得ることです。難しいし、しんどい同じことを繰り返すにあたって、何よりも求められ迫られているのは惰性を捨てることです。

それは、今を生きるための
真剣な努力である

今日、西宮公会堂兵庫県南部大地震犠牲者追悼の日礼拝の記念礼拝にあたっての説教は「それは、今を生きるための真剣な努力である」としました。中でも“真剣”について。真剣は刃物師たちが材料として選んだ鋼（ハガネ）を、熱して打ってを繰り返してできあがります。しかし、そうして鍛えた真剣も、使っていると鈍（なま）ります。鈍った真剣は今度は研ぎ直して切れ味を戻します。それを繰り返すことで真剣・刃物は削られてすり減ってしまいます。という真剣・刃物のことは言葉や生活のこととしてもこの国では生きていました。しんどい同じことを繰り返すためには惰性を捨てる、骨身をけずるということが生きることそのものだったのです。そんなこととして、死んだ人たちのことに向かい合い、死んだ人たちの生きられなかった世界を、人は生きるのです。

この言に命があった
そしてこの命は人の光であった

ヨハネによる福音書は「初めに言があった。言は神と共にあつ

6 た・・・」で始まります。ヨハネ福

音書を通読してみる時、「すべての人を照らすまことの光」という“理想”を伝えるのには、言（言葉）に依るしかないこと、そしてその力と限界のこととも思い知っています。

（菅澤 邦明）

あけましておめでとう！

「よいおとしを～」なんて、嬉しそうに新しい挨拶を交わして迎えた冬休み。みんながどんな冬休みを過ごしたのか、冬休みの生活表を見るのが、毎年とっても楽しみです！今年も、早速おもしろエピソードがあったようで、「あけましておめでとう」と言ったら不思議そうに「ありがとう」と言ったのだとか。読みながら思わず吹き出してしまいました。

そんな冬休みも終わり、「あけましておめでとう！」みんなが元気にやってきた3学期始園の日。大太鼓の音が響き渡りました。年長さん一人一人が「がんばるぞ～！」と力いっぱいいたたく姿に、2年前のぼっぼの頃が思い出されました。おたよりを読み返してみると、“・・・「わたしもやりたい！」と体がワクワク動いています。・・・年長さんになったらカッコいい姿を見せてね”と書いてありました。あれから2年、ワクワクと心を躍らせていたあのぼっぼさんたちが、こんなにも“年長”になって、大太鼓をたたいている！そして、その姿を憧れのまなざしで見つめるさんぼ、らった、ぼっぼぐみの子どもたち。こうして明日を楽しみに、これからを楽しみに過ごしていくのだと感じた時間でした。

雪がちらちら舞っているのを見て、「ゆきだ～！！」と窓のところに集

まって大騒ぎ！なんて日もありました。帽子をかぶっていそいで園庭へ。「ゆきたべたいな～。あ～ん」と口をあけながら歩いていたり、「ゆきだるまつくろう！」「てぶくろがいるよね」なんて本気で話している声も聞こえてきます。寒さも忘れて、大喜びしているみんなの姿に、私もワクワクしてきました。

冬の遊びも登場しています。「こままわしたいねんけど～」毎日のように、こままわし用の板の周りにはたくさん子どもたち。そこにちゃんとぼっぼさんたちも参加しています。ただただこまがまわるのを見て楽しんでいる子や、自分も！と見よう見まねでやっている子も。そんな子には先輩達からの指導もあって、いつのまに！？自分で紐を巻いて、こまをまわしているのにびっくりしてしまいます。板の周りではたくさんのドラマが生まれている！そんな冬ならではの光景でした。

1月17日には、高松公園で大地震子ども追悼コンサートが行われました。子どもたちと、中村朋子さん、そこに集まったみんなが歌をうたいました。そんな歌声に包まれて、胸が熱くなりました。14年前に感じたたくさんの思い、そこから今日までの毎日を、私はたくさんの出会った子どもたちと一緒に、懸命に生きて

きたことを強く感じています。ブックスタートの赤ちゃんのお祝いで、ただそこにいるだけで愛しい命に触れました。一人一人がそんなふうに生まれ、大切に育てられてきたのだということ、もちろん私もそんな存在の一人であることを嬉しく思い、幸せに感じています。

3学期もそんな幸せな毎日が守られますように。いつもたくさんの方々に支えられていること、感謝しています。

(上田 華子)

すずや便り

あけましておめでとうございます。平成も21年になりましたね。元号が昭和から平成に変わった時は、「歴史の変わり目だ！」とドキドキしたのを鮮明に覚えています。あの頃はまだ学生でした・・・時の経つのは早いです。

少し前から書店でパートをしているのですが、レンタルビデオ店に併設されているので開店前の作業中にもBGMが流れています。今どきの曲(?)にも少し詳しくなってきました。ある日、とってもいい歌が流れていて涙腺が緩みそうに・・・「うわ～仕事しながら～」と思いつつも、リサーチしたところSEAMOというバンドの「MOTHER」という曲でした。ぜひ聴いてみてください～母のツボを押さえ

ています(笑)。帰宅してネットで調べていたら長女が「あ、SEAMOだ」。何で知ってるの?「なんでも」と、よくある会話。ジャニーズ以外にも興味があったのか、と私。娘の意外な一面を見た気分。

長男は「NARUTO -ナルト-」の漫画にハマっています。せっせと小遣いで買ってきてはどっぷり浸っています。アニメで見たときエグイなあ、と思ったので漫画も手に取ることすらしていませんでした。ところが、彼との会話にナルトが出てくるようになるとこれが大変。ナルト、ホカゲ、シャリンガン・・・??暗号のようです。一生懸命説明して面白さを伝えようとする姿を見ていたら、親としてここはきちんと読まなきゃいか

ん！（実は漫画好き）と、サンタさんにも手伝ってもらい30巻まで揃えたところで一気に読み。いや～面白かった。同じ忍者モノでも白土三平の「サスケ」よりは明るいです。お陰で会話もはずんでいます。食わず嫌いをしなくてよかったです。

今までは「こんなのあるよ」と差し出す側でしたが、子どもの世界にお邪魔するのも楽しいものです。娘のお陰で「嵐」の顔と名前が一致するようになりました。20年どころか5年前でもこんな楽しみ方が出来るなんて想像もしませんでした。おみくじは大吉だったし、良い年になりそう！皆さまも素敵な一年になりますように。

（富家 香麻里）

みかん便り

あけましておめでとうございます。
第4回みかん便りです。

年末年始は今村組のLIVE練習で毎日忙しく過ごしていました。おかげさまで大成功に終わり嬉しかったです。京都・大阪・奈良・西宮・愛媛、いろんな県の友達が見に来てくれて、踊る前はかなり緊張してたんですよ。初めて知り合いに『かっこいい』って言われてだいぶテンション上がりました(笑)

幼稚園の先生、幼馴染、親友、恩師、って場所は違うけど、自分の生

きてきた時間を一緒に過ごしてきた人が1つの場所に集まって自分を見てくれているって言うことがとても不思議で、変に感動もしていました。こんなに他県の友達が集まるのは、将来結婚式挙げたときしかないやろって思ってたんで(笑)

関西京都今村組のLIVEはお金を取ります。アマチュアのダンスチームですが、4000円もの大金を取ってダンスLIVEをしています。毎年の合言葉は、「1円でもお金を取ったら俺らはプロなんや！！お客さんに対して 9

夢の時間を作って上げなあかん！！！！4000円が安いと思わせなあかん。そんな覚悟ができんやつは今すぐ出て行け！！！！」

毎年この言葉が僕らの合言葉です。今年も来てくれた人たちは満足して帰ってくれました。来年もがんばります。

さて、大学生活ですが、1月いっぱい1回生を終えてしまいます。高校時代とはぜんぜん違う1年でした。いろんな県から来た友達、たくさんの外国人、そして興味のあるたくさんの授業。特に外国人の友達はたくさんのお話を教えてくれました。言葉や文化、人種、宗教、色々違うところはありました。でも楽しいときは思いっきり笑うし、ケンカもする。お互い何を言っているかはよくわからないけど、何に対して怒っているかはよくわかる。言い争うのに疲れたら、あとはまた笑って話すようになるのも日本人と同じです。世界は広く遠いけど、同世代の人たちは基本的に似たような人間なんやと思っていました。2回か3回生では留学やインターンシップもやってみようって考えてます。

まだまだ俺は18歳のガキです。でも、ガキなりにこの1年は成長できました。新しい出会いから始まり、絶対にしてはいけないこともしてしまい、謝罪の重さを知りました。異文

たい仕事も深く考え出しました。これから20歳・21歳って年を重ねていって、どういう風に成長できるかが楽しみです。こんな僕ですが、周りの大人様、温かい目で見守ってってください。

それでは次回は春休み特集です。特に何もなさそうですがまた読んでみてください ほな

(河村 高志)

2009年1月 あんなこと こんなこと...

- ・ 1月 1日(木) 早天祈祷会 / 新年礼拝
- ・ 1月 21日(水) 聖書研究祈祷会
- ・ 1月 11日(日) 幹事会 / 教師会
- ・ 1月 13日(火) ゆっくりと聖書を読んでみませんか
- ・ 1月 14日(水) \ 28日(水) 読書会
- ・ 1月 17日(土) 大地震子ども追悼コンサート
- ・ 1月 18日(日) 兵庫県南部大地震犠牲者追悼の日礼拝
- ・ 1月 20日(火) 西宮公会堂教会カレンダー全体連絡会
- ・ 1月 25日(日) 2008年度交換講壇 説教：神戸教会 菅根信彦牧師

幼稚園

- ・ 1月 8日(木) 幼稚園3学期開始
- ・ 1月 17日(土) 共同文庫
- ・ 1月 26日(月) 年長雪山遊び
- ・ 1月 31日(土) たこあげ大会
- ・ 2月 7日(土) もちつき

にしきた商店街

- ・ 1月 4日(日) 津門川川掃除
- ・ 1月 8日(木) 西北街づくり協議会
- ・ 1月 13日(火) にしきた街舞台実行委員会
- ・ 1月 14日(水) 商店街役員会
- ・ 1月 16日(金) 西北活性化協議会
- ・ 1月 25日(日) 商店街新年会

アートガレージ

- ・ 火～金曜日：10時～17時 土曜日：15時～17時 開室日
- ・ 1月 13日(火) アートガレージ運営委員会
- ・ 1月 13日(火)～17日(土) ききるん活動日
- ・ 1月 20日(火) 丹波野菜市
- ・ 1月 20日(火) ききるんOBの会
- ・ 1月 27日(火) 第4回アートガレージ500円講座「生と死を学ぶ講座」

関西神学塾

- ・ 1月 9日(金) 午後7時～9時 使徒行伝を読んでみよう(39) 講師：桑原重夫
- ・ 1月 23日(金) 午後7時～9時 マルコ福音書註解(中)(55) 講師：田川建三
- ・ 1月 30日(金) 午後7時～9時 ヨブ記釈義(15) 講師：勝村弘也

新沢としひこコンサート実行委員会主催

ぼくのそら きみのそら

新沢としひこコンサートのご案内

記

場所：西宮共同教会・チャペルホール

日時：平成21年2月22日(日)

開演：17:00～19:00

〈 開場 16:30～ 〉

チケット代：3000円(一律です) *全自由席

対象：中学生以上

お問い合わせは西宮共同幼稚園まで

TEL 0798-67-4691

FAX 0798-63-4044

2009年 小黒三郎 組み木の雛人形 催しのご案内

小黒三郎 個展

今年の新作は、組み木の雛人形を秋田杉の曲げわっぱの三重の箱に収納した「春の海びな三段飾り」です。「春の海」というタイトルをこの三段飾りにつけた理由は、魚や貝など海の生きものたちが各段に入ってきたからです。魚を肩にのせた雛人形は竜宮城の乙姫さまのようです。宮城道雄の箏曲「春の海」ののどかな曲が作図しながら聞こえてくるようでした。

五月人形や最近のデザインの組み木も展示します。ぜひお越し下さい。

小黒三郎・組み木のお雛さま展 in 西宮

2009年2月10日(火)～15日(日)

アートガレーヂ

西宮市南昭和町10-22 在廊日2月15日(日)

教会学校から

《12月の活動報告》

12月7日(日)

のびる焼きを食べよう

12月14日(日)

わが町クリーン大作戦

12月18日(日)

合同子どもクリスマス会

12月21日(日)

教会学校クリスマス会・プレゼント交換

《1月の活動報告》

12月28日、1月4日は冬休みです。

1月11日(土)

新年カルタ大会

1月18日(日)

兵庫県南部大地震犠牲者追悼の日礼拝
(合同)

1月25日(日)

たこつくり

1月31日(土)

たこあげ大会

2月7日(土)

もちつき

まいのなんでも案内

早いもので、もう2009年ですね。「行く」「逃げる」「去る」は「師が走る」よりも早い気がするので、今年も日々を大切に過ごしたいと思います。と、落ち着いて言えるようになったのは本当にここ数日で、年末年始は卒業論文に明け暮れていました。相変わらずのギリギリさ発揮でした。私は割と文章を書くのが好きな人間に分類されると思うのですが、論文を書くのは初めてだったので、なかなか書き進められず……。レポートレベルのものになってしまった感は否めませんが、何とか2万字、書き上げました。というわけで、今回は紹介をお休みして、私の文章の書き方について、少しお話ししたいと思います。

書き終わってから、同じように卒論を書いたクラスの友達と話していたのですが、やっぱり文章を書く上でのこだわりやら手法は人それぞれですね。よく作家さんのエッセイやインタビューを読んでも思いますが、決まったやり方っていうのはないんだと身をもって感じました。書きあがったものに対する感じ方や接し方も色々ですしね。大まかに、「書くことを決めてから書く」か「書きながら考える」か、という2通りもありますし、「毎日読み直しながら修正を加え

ながら少しずつ書き進める」か「勢いで書いて、日を改めた推敲はほとんどしない」か、という分類もできます。私は大抵、この文章なんかは、大体書くテーマを頭の中で決めてしまってからパソコンを開いて一気に書いて、読み直しはしないです。日本語のおかしいところとか、文章のつながりとかは、書きながら適宜修正していくので、変換ミスなんかもそんなにないと思います。まあ多分一般的にブログってそんな感じですよ。手軽さが売りというか。で、これまで大学4年間、レポートや就職活動のES（エントリーシート）も大体そんな感じで書いてきたわけです。勢い勝負。

それでも、そんな雑な文章書きの私でも、文章を書く上で気にしている事はいくつかあります。その一つが、カタカナ語の用法。私、カタカナ外来語があまり好きじゃないんです。勿論言語は文化やし、その言葉そのものでないと伝わらないニュアンスがあるのは百も承知なんですけど、そんなの、日本人である相手にそのニュアンスが伝わるかなんて分からないなあと思ってしまして。とりあえずカタカナ語を使ってしまう前に、手持ちの日本語で何とか伝えられないか考えるのも一興、みたいな。西洋

史が専門のくせに、個人的にカタカナ語覚えるのが苦手ってなのも理由かもしれないんですけど。まあ、格好良く言えば、外国語より先に日本語をきちんと使えるようになりたいんです。言葉遣いとか敬語とかだけじゃなくて、自分なりに言葉を慈しんで納得して発したい。勿論主観だし、他人には全く求めない(だってそんなの人それぞれ)ですけど。この文章だって、さっきからワープロソフトに校正されっぱなしですし。

ここで問題なのが、どこまでが日本語で、どこからがカタカナ語かっていう話です。その線は正直、私の中でも非常に曖昧。元々漢字だって中国から伝えられたものですし。でも「外国語」と「外来語」は違うと思うんですよ。「外国語」レベルの言葉を、よく吟味せずに「外来語」使用するのが、嫌なんです、多分。言葉=文化だから、外国から考えとか物とか入ってくる以上、その概念を表す言葉も入ってくるのは仕方ないし、当たり前です。ただ、特殊用語とか業界用語として入ってきた外来語を、一般用語とする時点で、よく考えることが必要だとも思うのです。例えばうちのゼミでは当たり前のように「テクニカルターム」って言葉が使われています。私は最初何のことか分かりませんでした。辞書ひいて「専門用語」という意味だって知って、でもそこに「専門用語」以上の意味は必要

ないと思ってるので、そのまま「専門用語」という言葉を使ってます。必要以上に神経質になるのもおかしいですけど、自分なりの「日本語」「外来語」「外国語」の区別を持っていたいんですよ。普段何気なく使ってる言葉ですけど、たまにはそんな小難しく考えるのもいいかもしれませんよ。

(高橋 舞)

つとがわ 編集後記

昨年は、牛の組み木やバッチ（デザイン・小黒三郎）を、あれこれ電動糸のこで切りました。切っている際に油断して、切断した木の端で指を切り、“三針”ばかり縫うはめになりました。

花が歌い 花が泣く
私は 角を
突きつけることを
好まない
結ばれた 花の
香りの 広がった記憶が
私の 誇りです

月が歌い 月が泣く
私は 心が
嘆くことを
好まない
冷たい 光が
心に 届いた記憶が
私の 誇りです

大地が歌い 大地が泣く
私は 蹄を
蹴りあげることを
好まない
重い 荷車を
一步一步 引いた記憶が
私の 誇りです

1月、誕生日を迎えた日に、たくさんの方々にお祝いをしていただきました。家族から、友人から、おめでとうのメールをもらったり、そして幼稚園に来ると子どもたちから「おめでとう！」と言ってもらったり……。いくつになってもこんな風にお祝いしていただけるなんて、とても嬉しく思います。そしてそんな多くの方々を支えられ今まで過ごしてこれたことに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます！

(N)

今年も1月17日を迎え、子どもたちと追悼コンサートの時間をまもらしました。子どもたちの、いつもと変わらない、元気いっぱいの歌声を聴き、こうして毎日みんなと過ごすことができている喜びを改めて感じました。

毎年、この日は、命の尊さを再認識しますが、今年はそれに加え、「何気ない日常のありがたさ」を感じた日となりました。

(Y)

お正月、田舎に帰った時に、小さい頃によく登っていた高御倉という地元の山に久し振りに登りました。私の父と母と「はじめてやまにのぼる！！」という甥っ子も一緒です。4人でけもの道を休憩しながら頂上を目指しました。そんな風にまた登るなんて思いもしていませんでしたが、小さい頃、祖父と一緒に毎年のように登っていたことを、小さな甥っ子の背中を見つめながら“私もこんなだったのかなぁ・・・”と、思い出しながら登りました。

(I)

’82年にはじまったうどんツアー。当時K学大の学生食堂のうどんは100円だった。冬の様々な景色を楽しみながら、ちょっと寒い中を走ったり跳んだりしつつ、往復6キロ程の道のりを歩く。一杯の熱いうどんは最高！！毎年私流何でもアリ！の場所がなくなったことを嘆きつつ、「先生閉まってます」「閉まったらあければいいのよ」の強気も通じるところが少なくなったことを実感しつつ、でもそれなりに子どもの成長を感じる冒険をする。そんな「ツアー」が始まっています。

(J)